
幕末の南海トラフ巨大地震(2)

(石橋克彦：南海トラフ巨大地震—歴史・科学・社会、岩波書店、2014、33-45)

2014年10月10日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

(要約)

・1854年安政東海地震

1854年は日本で巨大な地震が連発した年であった。最初の巨大地震は1854年12月23日の午前10時頃に発生した。M8.4と推定され、東海地方を中心に大災害をもたらした。この地震の揺れは東海地方から九州まで感じられ、三河湾・伊勢湾の沿岸部では震度6以上になった。この地震による居宅の潰れ・消失は約3万軒、は2000~3000人といわれている。

津波による被害も発生し、多数の倒壊・流出家屋や溺死者が出た。また、地震によって駿河湾西岸から遠州海岸東部までが著しく隆起した一方で浜名湖北岸、三河湾沿岸、鳥羽付近が沈降するなど地形の変化もみられた。その地形の変化によって富士川河口近くの西岸では耕地が増えた一方、東岸では富士川の流が大きく変わって洪水に悩まされるようになった。二次災害も報告されており、地震でゆるんだ地盤がその数年後の豪雨で崩れ、社寺や民家多数を巻き込んだといわれている。

当時、日本の中心地であった江戸でも強い揺れがゆっくり長時間続く長周期地震動に見舞われ、建物被害、溢水、地割れなど大きな被害が出たというが、これらの事実は来るべき南海トラフ巨大地震の参考にすべきことである。

・1854年安政南海地震

安政東海地震の約30時間後(1854年12月24日16時頃)には別の巨大地震が四国を中心とする西日本に発生した。三重県中南部から西、中国・四国全域、南部と西部を除く九州までで震度5以上の揺れがみられた。再び大津波が生じ、最大波高は高知県中土佐町久礼で16mであったといわれ、その他の地域でも9m~15mの津波がみられた。これらの地域では多くの家屋が倒れ、流され、多数の死者が出た。また、津波は紀伊水道と豊後水道を通して瀬戸内海全域にも侵入した。大坂の安治川河口では波高は2m弱であり、大津波という程ではなかったが、河口に停泊していた数百の大船を上流まで押しあげた。多くの堀川には、前日の東海地震による大揺れで、多数の町人が家財道具を小舟に積んで避難していたが、遡上してきた大船によって小舟は押しつぶされた。大坂市中の被害は死者300人近く、大小廻船の破損が600~1100、川船の破損600~700程度であったといわれている。大坂では1707年にも宝永地震が発生しており、もっと大規模な被害が生じていた。その経験を忘れて同じ被害に遭ったことを悔やんだ人々は、死者の慰霊と後世への警鐘のために石碑を各地に建てた。安政南海地震から150年程たったいま、わたしたちは先人たちの警

鐘を活かさなければならぬ。

(考察)

日本は地震大国である。地震はそれそのものの被害も恐ろしいが、より被害が拡大する原因となるのは地震が起きたあとに発生する建物倒壊や火災、津波などである。まだ記憶に新しい東日本大震災では地震のあとに最高波高40mの大津波が東北地方及び関東地方の太平洋側に押し寄せ、甚大な被害をもたらした。また、東北から関東に渡って液状化現象、地盤沈下、ダムの決壊などが発生し広範囲に渡って各種インフラが寸断されたため、多大な混乱と莫大な経済的損失を生じた。現在地震が起きてから約3年半が経過しているが、東北地方の一部ではまだ復興したとはいえない状況にある。西日本では1995年に甚大な被害をもたらした阪神淡路大震災を経験したため、以来地震に対して危険意識をもち、対処法を講じている。自然災害は防ぐことはできないかもしれないが、それによって生じる二次災害を最小限に留める努力は常にしていかなければならない。このことは地震に限らず、台風や山の噴火など他の自然災害にもいえることであるが、何千年も前から災害を経験してきた先人たちの教を活かすことが重要である。